

4月19日（日）サムエル記第二4章1～7節

「すなわち、彼らが家に入ったとき、イシュ・ボシェテが寝室の寝床で寝ていたので、彼らは彼を突き殺して首をはねた。彼らはその首を持って、一晩中アラバへの道を歩いて行った。」

（7節）

アブネルの死により、サウルの家は終わりを迎えたかのようにになりました。なぜなら、アブネルがいなければ彼らは決してダビデに対抗することができなかったからであり、またイシュ・ボシェテ自身もアブネルに依存していたところがあり、実際に彼なしでは王としての地位を保つことすら難しかったからです。ですから、イシュ・ボシェテはアブネルがヘブロンで死んだことを聞いて気力を失い、全イスラエルもおじ惑いました。2節に二人の略奪隊の隊長が出てまいります。一人はバアナで、もう一人はレカブです。二人ともベニヤミン族のベエロテ人リンモンの息子であったと紹介されています。なぜベニヤミン族ベエロテ人と言われているのかは、その後に「ベエロテもベニヤミンに属すると見なされていたからである。」と説明されています。そして、そのことの説明が3節にありますが、ヨシュア記9章15節でヨシュアはギブオンの住民と和を講じ、彼らを生かしておくことと盟約を結びましたが、17節を見ますとその中の一つにベエロテがありました。そして彼らはギタイムに逃れて、そこで寄留者となったのだらうと思われます。そして、ネヘミヤ記11章33節を見ますと、ギタイムがベニヤミンの子孫として紹介されていますので、ベエロテもベニヤミンに属すると見なされることとなったのです。

4節にヨナタンの息子のメフィボシェテが出てまいります。恐らくアブネルとこの後のイシュ・ボシェテの死をもってサウルの家の王位を継ぐ者がいなくなっていく現状において、どうしてもメフィボシェテがサウルの後継者として注目されることになりますし、それとともにダビデがヨナタンと結んだ子孫を守るとの約束（サムエル記第一20章15節）を思い出させるという意味もあるでしょう。

レカブとバアナがイシュ・ボシェテの家にやって来ると彼は昼寝をしていました。小麦を扱う者として家の中にまで入り込み、彼らはイシュ・ボシェテの下腹を突いて殺し、首をはね、人に見つからないように、一晩中アラバへの道を歩いて行きました。そして彼らはヘブロンでダビデのもとにイシュ・ボシェテの首を持って来て「あなたの敵」（8節）と呼んでいますので、敵であるイシュ・ボシェテの首をダビデの前に差し出したことは大きな手柄として認めてもらえると思ったかもしれません。それによりダビデから褒美や昇進が約束されることを期待したことでしょう。しかし、物事は彼らが期待したとおりに進みませんでした。私たちは、自分の周りで起こるさまざまな出来事を見ながら、どうすれば自分にとって有利になるかを考えながら行動することがあります。それが必ずしも悪いとは思いませんが、大切なことは行動する前に慎重に考えるべきであり、何よりも主の御前に謙遜にひざまずいて主のみこころを祈り求めることです。それが、キリスト者のあるべき行動パターンです。

4月20日（月）サムエル記第二4章8～12節

「まして、この悪者どもが、一人の正しい人を家の中で、しかも寝床の上で殺したとなれば、私は今、彼の血の責任をおまえたちに問い、この地からおまえたちを除き去らずにいられようか。」
(11節)

レカブとバアナの二人は、ヘブロンにいるダビデのもとにイシュ・ボシェテの首を持って来ました。昨日も指摘しましたが、彼らはイシュ・ボシェテを「あなたのいのちを狙っていたあなたの敵」と呼び、「主は今日、わが主、王のために、サウルとその子孫に復讐されたのです。」と、まるで自分たちが主のみこころを成し遂げたかのような言い方をしていますが、果たしてそうなのでしょうか。彼らに対してダビデは10節で、1章1～10節に記されている、サウルの王冠と腕輪をダビデのもとに持ってきてサウルの死を告げたアマレク人のことを語ります。結局、このアマレク人は討たれて死んだのですが、ダビデはレカブとバアナを「この悪者ども」と呼び、彼らがいかに罪深いことをしたかを思い知らせます。つまり、イシュ・ボシェテは決してダビデのいのちを狙っていた敵ではありませんでしたし、むしろ正しい者でした。その何の落ち度もないイシュ・ボシェテのいのちを取ったことの罪はあまりにも大きかったのです。そこでダビデは「私は今、彼の血の責任をおまえたちに問い、この地からおまえたちを除き去らずにいられようか」と言います。その結果、レカブとバアナは、殺され、手足を切り離され、ヘブロン池のほとりでつるされました。一方、イシュ・ボシェテの首は、ヘブロンにあるアブネルの墓に持って行って葬られました。

すべての行動には必ず責任が伴います。社会においても私たちは自分の行動において説明責任を求められることがあるでしょう。主も私たちに対して説明責任を求められます。特に、主の御名によってなしたことに對して本当にそれが主のみこころにかなったことだったのかを問われます。ですから、私たちは決して軽率に行動せず、主にあつて祈りつつ慎重に行動しなければなりません。そして、主の御前に常に良心の責めのない行動を心がけたいと思わされます。

4月21日（火）サムエル記第二5章1～5節

「ダビデは三十歳で王となり、四十年間、王であった。」(4節)

サウルとヨナタンは戦死し、サウルの子のイシュ・ボシェテとサウル王家の軍の長であつたアブネルも死にました。イスラエルの全部族は、ダビデのもとに行かざるを得なくなり、ダビデのもとに来て、まず「ご覧ください。私たちはあなたの骨肉です。」と言います。これは、ダビデがサウルの娘婿であることでサウル家との強い血縁関係を意味しています。次に、「サウルが私たちの王であつたときでさえ、イスラエルを動かしていたのはあなたでした。」というのは、これは、ダビデが軍の長として戦場で勝利を重ねていたことを意味し、軍事指導者であるべき王としての十分な資質を備えているということです。三つめが、「主はあなたに言われました。『あなたがわたしの民イスラエルを牧し、あなたがイスラエルの君主となる。』と。」とありま

す。つまり、ダビデがイスラエルの君主となることは主のみこころだということです。3節にはダビデが王となる即位の様子が記されていますが、以前にサムエルによってダビデは個人的に油注ぎを受けましたが、ここでは公の油注ぎをもってイスラエルの王とされました。

4節には「ダビデは三十歳で王となり、四十年間、王であった。」と記されています。ダビデは、サウルによって執拗に命を狙われました。しかし、どんな危険な中にあっても主はダビデの命を守られました。そして、サウル、ヨナタン、イシュ・ボシェテ、アブネルと世を去る中で、最後にダビデこそが全イスラエルが認める王として油注ぎを受けました。どんなに時間がかかっても、また一人ひとりがどのような中を通されても、主のみこころは必ず成就することを、ダビデの姿から私たちはあらためて思わされます。私たちも、主のみこころになる、その時まで主が守り支え続けてくださることを信じて歩んでまいりたいと思わされます。

4月22日（水）サムエル記第2章6～12節

「ダビデはこの要害に住み、これを「ダビデの町」と呼んだ。ダビデはその周りに城壁を、ミロから一周するまで築いた。」（9節）

これまでダビデはヘブロンにいました。ヘブロンは海拔約1000メートルの高地に位置していて、戦略的にはすぐれた町でしたが、王として政治を行うには、南部のユダの地域に位置していて不便でした。そこでダビデが新しく自分たちが住むべき地として目を付けたのがエルサレムでした。しかし6節にありますように、そこにはイスラエルが追い払いきれなかったエブス人が住んでいました。（ヨシュア記15章63節参照）それとともにエルサレムの攻略の困難さは、「おまえは、ここに攻めて来ることなどできない。目の見えない者どもや足の萎えた者どもでさえも、おまえを追い出せる」（6節）とのエブス人の自信に満ちたことばからも分かります。しかし7節では「しかし、ダビデはシオンの要害を攻め取り、これをダビデの町と呼んでいます。その戦術は、8節にありますように水汲みの地下道を通して中に攻め込んで行くというものでした。こうして「ダビデはますます大いなる者となり、万軍の神、主が彼とともにおられた」（10節）ことが証しされたのです。11節にはツロの王ヒラムが、材料を送って王宮を建てたことが記されています。そして、最後に12節で「ダビデは、主が自分をイスラエルの王として堅く立て」とありますが、ダビデ自身も主によって自分がイスラエルの王として立てられたことを自覚していたことでしょう。その後「主の民イスラエルのために、自分の王国を高めてくださったことを知った。」とあります。主がダビデを王に立てて、豊かに祝福してくださったのは、決してダビデ自身のためではなく、あくまでイスラエルの民のためだったということです。主が私たちを豊かに祝福してくださるのは、それを自分の誇りにするためでも、自分が楽しむためでもなく、周りの兄弟姉妹や自分の周りにいる人々に仕えるためです、私たちもそのような歩みがなされているでしょうか。

4月23日（木）サムエル記第二5章13～16節

「エルサレムで彼に生まれた子の名は次のとおり。シャムア、ショバブ、ナタン、ソロモン」
(14節)

ダビデがイスラエルの王となって、エルサレムで三十三年イスラエルとユダの全体を治めたということは、ダビデの後の王位継承が問題となることを意味しています。まず3章2～5節を見ますと、ヘブロンで生まれた子どもたちの名が六男まで列挙されています。さらに今日の5章14節からはダビデがヘブロンからエルサレムに来た後に生まれた子どもたちです。並行記事の歴代誌第一14章3～7節にはサムエル記第二5章13節にある側女は出てまいりません。このことについてボールドウィンという学者は、王位継承に側女の子は関係がないので、歴代誌第一14章3～7節では側女は触れられていないと説明し、サムエル記第二5章13節では完全を期すために側女たちを妻の前に置いたと説明しています。

歴代誌第一3章5節を見ますと、シャムア、ショバブ、ナタン、ソロモンの四人は、バテ・シュア（バテシェバ）から生まれたことが分かります。皆さんもご存じのことかとは思いますが、サムエル記第二11章から見ますと、ダビデはウリヤの妻であるバテ・シュアと姦淫の罪を犯します。そして、その自分の姦淫の罪が発覚することを恐れて、夫のウリヤを最も先頭の激しい場所に行かせて戦死するように仕向けます。そのような姦淫と間接的な殺人の結果、ダビデとバテ・シュアとの間には四人の子が生まれ、そのうちの一人のソロモンがダビデの後の王位を継ぐこととなりました。そしてこれは驚くべきことであり、主はなぜ姦淫の罪の結果として生まれた子を王位につけるのだろうと思ってしまう。しかし、主のなさることは私たちの思いをはるかに超えています。その中であって主は最善をなされます。私たちは主のなさることについて、驚かされたり、分からないことが多くあります。その時に私たちは答えがほしいとか、納得したいと思いますが、むしろ分からないことは主におゆだねすべきです。それが私たちの信仰のあり方の一つです。

4月24日（金）サムエル記第二5章17～21節

「ダビデは主に伺った。「ペリシテ人のところに攻め上るべきでしょうか。彼らを私の手に渡してくださるでしょうか。」主はダビデに言われた。「攻め上れ。わたしは必ずペリシテ人をあなたの手に渡すから。」(19節)

ペリシテ人はダビデが油注がれてイスラエルの王となったことを聞き、ダビデを狙って攻め上って来ました。18節で「レファイムの谷間を侵略した」とありますが、ここはエルサレムにほど近く、町から眺望できるほどの位置にありました。そして、なぜここをペリシテ人が侵略したかと申しますと、イスラエル人が占有できなかったところで、ある意味ダビデの王国の中で最も弱い場所だと言えるところだったからです。さらに、このユダの北境の地はサウルの出たベニヤミン族に隣接していて、そこを攻略すれば、ダビデが王となった新しい王国に不協和

音を入れることができると思ったのかもしれませんが。そのような中でダビデは、あわてて出ていくことをせず、まず主に伺いました。それは決して自分の力を過信して、自分で何とかするとは思わなかったからだとも言えます。またレファイムを侵略したペリシテ人を恐れることもありませんでした。そこからダビデの主に伺う姿勢が出てきたのです。私たちも何かを始める時には、まず主に伺うべきです。そしてダビデは主に二つのことを伺っています。一つは、ペリシテ人のところに攻め上るべきかどうかということで、もう一つが主が彼らをダビデの手に渡されるかどうか、すなわち勝利をすることができるかどうかということです。それに対して主は、まずは攻め上れと言われ、次には「わたしは必ず、ペリシテ人をあなたの手に渡すから」と言われました。そして戦いは主が言われたとおりの大勝利を取めました。それを「主は、水が破れ出るように、私の前で私の敵を破られた」というほどの勝利だったのです。主は、すべてを約束されたとおりのみわぎをなされて、ご自身の栄光を現わされます。主を信じましょう。

21節を見ますと、「彼らはそこに自分たちの偶像を置き去りにした。」とあります。戦いの勝利を祈願するために偶像を持って来たのでしょうかけれども、戦いは完全な敗北となり、偶像が何の役にも立ちませんでした。私たちも偶像の神ではなく、生ける主を信じているのですから、信仰をもって主に従い、主の栄光を見させていただきましょう。

4月25日(土) サムエル記第5章22～25節

「ダビデは主が彼に命じられたとおりにし、ゲバからゲゼルに至るまでのペリシテ人を討った。」(25節)

22節でペリシテ人は、またも攻め上り、同じようにレファイムの谷間を侵略しました。ダビデは前回の勝利で気を良くして、すぐにペリシテ人が侵略した所へと向かおうとしたり、自分の力に頼ろうとはせず、23節で再び主に伺いを立てます。おそらくダビデは、前回の勝利は自分の力によるものではなく、主によって与えられた勝利であることを自覚していたのでしょう。そしてダビデの伺いに対して主は今度は、まず「上って行くな」と言われ、バルサム樹の茂みの前から彼らに向かえ。バルサム樹の茂みの上で行進の音が聞こえたら、そのとき、あなたは攻め上れ。」と言われました。つまり今回の主の指示は、しばらく待つようにということでした。そのようにして主はみこころによって答えを変えることがありますから、常に主に伺わなければなりません。それとともに私たちが間違ってはならないことは、主のみこころは絶対に変わらないということはないということです。もちろん、みこころに従って歩んでいても、どこかで主は別の導きを与えることがあるのです。私も、それぞれ牧会者として新しい教会に赴任する時には主のみこころと信じて、その教会に遣わされていきました。しかし、主のみこころと確信して、そこでの働きを終えて、別の働きへとみこころにより導かれることも当然あります。そのことをぜひおぼえるべきです。

24節の後半で「そのとき主はすでに、ペリシテ人の陣営を討つためにあなたより先に出ているからだ」とあります。私たちが待っている間に、主は先に働かれてみわぎをなしておられ

ます。私たちが信仰により待つということは、ただ時間だけが経過するということではなく、主が私たちのために働かれる機会を与えていることだということをおぼえましょう。

25節で、ダビデは主が彼に命じられたとおりにして、ペリシテ人を討ちました。ある先生が、「指揮官の命令に従わない兵士ばかりで戦いに勝てますか。私たちは自分たちの指揮官であるイエス様の命令に従っていますか」と説教されたことがありました。私たちは最高指揮官であるイエス様の命令を常に伺っているのでしょうか。それともイエス様の命令やみこころを無視して自分勝手に何かをしている教会になってしまっていないのでしょうか。常に一人ひとりが主が命じられたとおりに動く教会であることを願います。